

震災を経験して感じたこと

◎鈴木 孝¹⁾
公立能登総合病院¹⁾

令和6年の元日は北陸の冬には珍しく天気は晴れ、あの時間が来るまでは新年初日を穏やかに迎えられたと感じた人は多かったと思われる。午後4時10分、能登半島を震源とするM7.6、最大震度7の地震が発生し、当院がある七尾市でも震度6強の揺れを観測した。この地震では家屋倒壊、津波、地滑り、土砂崩れ、火災、液状化現象など地震がもたらす災害がすべて発生したといわれている。石川県、富山県など広範囲にわたり人的、物的被害が出た。

地震発生時、私は自宅近くの国道沿いの歩道を歩いていた。突然の大きな揺れで立っていられず地面に四つん這いになり転がらないように必死に耐えていた。道路では自動車が跳ねる様に激しく揺さぶられ、あちらこちらから漏れ聞こえてくる悲鳴、不気味な地鳴り、アスファルトがひび割れ擦れる音、泥水が滲み出る様子など今まで体験したことのない恐怖だった。

帰宅後家族の無事を確認し、日没前に到着できる様に急いで病院へと向った。大津波警報のため高台にある当院周辺は多くの避難者で混雑していた。

当院では地震発生20分後の午後4時30分に災害対策本部が設置され、まず患者、職員の安全確認と被害状況の把握が行われた。院内の患者と職員に人的被害はなかった。建物内部では天井パネルの崩落や水道管の損傷とスプリンクラーの誤作動による漏水、エレベーターの故障、電気は瞬間的停電はあったものの無事だった。また電子カルテは稼働していて各部門システムも無事だった。しかし、断水と受水槽の破損が重なりしばらくの期間、手術と透析、生化学検査が実施不可能となった。

検査室内は書類が散乱し、検査機器もズレ動いたが幸いにしてすべての機器に故障はなかった。前述のとおり断水の影響で精製純水が作製できず生化学検査が実施できなくなった。輸血関連の保冷库、冷凍庫は転倒や故障もなく温度管理はされていて血液製剤はすべて無事だった。自主登院職員が到着する前に日直者が1人で検査機器の点検や復旧作業を行っていたため実施可能な検査や血液製剤の在庫数など検査室の状況を直ちに災害対策本部へ情報提供することができた。

この状況下、災害拠点病院である当院には負傷者が次々と搬入され、トリアージ場所であった一般外来フロアは騒然としていた。その中には骨盤骨折の重傷者がおり輸血を実施している。製剤の供給は地震発生直後にもかかわらず石川県赤十字血液センターに対応していただけた。

今回、発災直後からの輸血体制や輸血事例、検査室の復旧までの経過、また地震直後に自主登院した臨床検査技師は院内でどのような行動をしたのか、時間の経過とともに生じた問題点、被災時に慌てないための準備など震災を経験して感じたことを話す予定である。